



聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。とともに左耳をそがれた。他の殉教者



発行日：2014年12月3日／発行者：荒谷 幸二郎／編集者：竹内 光／デザイン：鈴木 博文／題字：山本 廣
イエズス会聖三木図書館

〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1岐部ホール内 Tel. 03-3262-0364 http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/

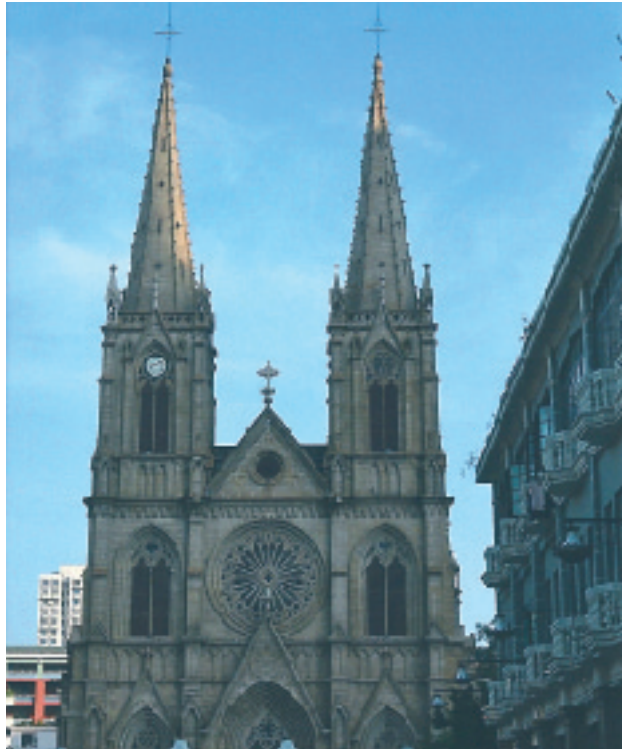


キリシタンの通史

『バテレンの世紀』に想う

日本近代史家 渡辺 京二

大航海時代の幕開けから「選択」と言う月刊誌に『バテレンの世紀』と題する連載を始めて、もう九年目に入った。こんなに長引いたのは、与えられたスペースが見開き二ページで、原稿用紙にすれば七枚程度という短さだったからだ。一つにはエピソードをふんだんに盛り込んだせいもある。歴史は詳しく書かなければ駄目だと、小林秀雄が語っているのを最近知ったけれど、やはりこの人は判っていた。中味は、タイトルからお判りのようにキリシタン史である。ポルトガルがアフリカ西岸探検に乗り出すところから初めて、やっと島原の乱直前のところまで漕ぎつけた。あと一年も書けば、この長すぎた連載にもケリを付けられよう。そもそも何故こんな物語に着手したのか、われながら狐につままれたような気が



中国・広州市のカトリック大聖堂

イエズス会中国センターの井上潔神父らは3年前の夏、ザビエルの来日後の1582年中国・マカオに上陸して中国宣教活動をした同会士マテオ・リッチ師の足跡をたどった。広東省の省都・広州市内で高さ30mはある鐘楼を備えた堂々としたカトリックの大聖堂に目を奪われた。(関連記事3ページに)

がする。いろいろ動機はあるが、和辻哲郎さんへの報恩ということもひとつにはあったかも知れない。ごく若いころ『鎖国』を読んでワクワクした。しかし今日では、和辻さんが『鎖国』を書いたころに較べて、キリシタン研究は飛躍的に進んでいる。しかし、その研究成果を、和辻さんのように通史として一般読者に提供する仕事はする人がいない。和辻さんが生きていれば全部書き直したかったであろう。それなら自分が、と私が思い立ったのは、不遜だったろうか。

イエズス会が歴史の主役

キリシタン史となれば主役はイエズス会である。私がこの一文を寄稿するのは日本イエズス会の図書館の会報なのだ。でも私はカトリック信者でもなく、いわゆるイエズス会とは何の関わりもないの

で、多少乱暴なことを言っても許されるかと思う。イエズス会というのは、実に興味津々たる団体である。こういう団体は世界史上初めて出現した。修道会には昔からあったが、イエズス会は根本的に違う所がある。吾が仏尊しという言葉がある通り、いかなる宗派もおのれの信仰をひろめようとするのは当然だ。

世界のキリスト教化こそ

しかしイエズス会の根本的に新しいところは、世界がキリスト教化されるのは世界史の必然、あえていえば目的であり、キリスト者とは人間たる絶対的条件だと信じ、その世界史的任務、つまり地上のすべての人間をキリスト者にする任務のためには、おのれの命を捨てるのを光栄と感じた点だ。人間はキリシタンたることによつてのみ、真の人間となるのだ。イエズス会士がすさまじい迫害に耐え、殉教の栄えに就いたのも当然だ。

フランスの詩人ルイ・アラゴンは『共產主義の人間』で未来の理想的人間像を描いたが、それは十六・七世紀のイエズス会士上の理想的人間像と極めて近かった。つまり人間を真に人間の名に値するものとする世界史的使命の使徒、という点で近かった。

もちろんイエズス会自体に変遷はあるし、今日のイエズス会の考え方について私はまったく無知である。ただイグナティオの考え、それに奉じた初期イエズス会士の信念について、私は以上のような感触を持ったし、その点が実に興味津々だったのだ。妄語にわたつたとすればお許し願いたい。

【渡辺 京二氏】一九三〇年生まれ。第五高等学校を経て法政大学卒業。熊本市在住の日本近代史家。一九九八年『逝きし世の面影』で和辻哲郎文化賞を受賞。二〇一〇年『黒船前夜』ロシア・アイヌ、日本の三國志』で大仏次郎賞受賞。思想、文明、評論の著書多数。



上智大学とカトリックの遺産

上智大学学長 早下 隆士

聖三木図書館長の宗先生から、「ゆるし」への執筆の機会を頂いた。心から感謝申し上げたい。聖三木図書館は、イエズス会の大切な財産になっている。私たちも歴史を記憶するキリスト教関係の蔵書から、多くのことを学ぶことができる。一五四九年にイエズス会宣教師の聖フランシスコ・ザビエルが来日し、キリスト教を伝えると共に、西洋と東洋の架け橋となる「ミヤコに大学を」と願ってからおよそ三六〇年の時を経て、一九一三年に上智大学が誕生した。最初は商科、ドイッ文学科、哲学科の僅か三学科、十五名の学生からスタートした大学である。百年の歴史を経て、二〇一四年には総合グローバル学部が誕生し、九学部二十九学科を擁する総合大学へと発展し、現在では一万二千人を超える学生に恵まれている。大変有り難く思っている。次の百年に向けて幸い本学は、スーパーグローバル大学創成事業にも採択された。まさに西洋と東洋を繋ぐ架け橋（コネクトハブ）の大学として、先人達の期待に応え他者のために貢献できるグローバル人材の育成を進めたいと考えている。

西洋と東洋をつなぐ架け橋

さて聖三木図書館の理念・目的・目標は、日本の文化的土壌にキリスト教の思想と文化を紹介し、日本文化の根幹をなす東洋の思想と西洋文化の核心にあるキリスト教思想の間に対話を促すために寄与せんとするものとする。これは上智大学がカトリック大学として大切にすべき理念でもある。聖三木の由来は、キリシタン時代の日本人殉教者でイエズス会修道者であった青年パウロ三木に因んでいるとのことである。聖フランシスコ・ザビエルの来日後、キリスト教の歴史も多難



明治新政府での迫害・浦上四番崩れ

津和野教会主任司祭 山根 敏身

であった。豊臣秀吉の時代にバテレン追放があり、禁教令とともに一五九七年には、パウロ三木を含む二十六人の信徒が殉教した。その後、徳川時代もキリスト教への迫害が続き、一五〇年余りの間、キリスト教信仰は日本では閉ざされたままであった。その後、一八五四年のペリーの和親条約に始まり、一八六五年にフランス公使のために建てられた長崎の大浦天主堂に、隠れキリシタンとして生き続けた浦上村の十数名が現れる。大浦天

山陰の小京都と言われる島根県津和野町。毎年五月三日、観光客の見守る中を全国から集まった約千五百名の信仰者の行列がロザリオを手に、聖歌を歌い、アヴェ・マリアの祈りを唱えながら乙女峠目指して歩みます（写真）。

長崎・浦上の全村民三千人余が流罪

乙女峠は浦上四番崩れの信者たちの殉教地なのです。江戸時代末期の開国（一八五八）により、長崎にフランス寺（大浦天主堂）が建立（一八六五）され、二百五十年に及ぶ迫害の中で信仰を守り通した潜伏キリシタンたちが発見されることになりました。江戸幕府や明治維新政府はキリスト教を禁止し、迫害がはじまりました。所謂浦上四番崩れと言われる出来事です。こうして三三九四名の浦上全村民は西日本の十萬石以上の諸藩に配流されることになりました。津和野藩はわずか四萬石の小藩でしたが、神祇官に

主堂の司祭であったプチジャン神父に一人の女性が「我らのムネはあなたのムネと同じ」「サンタ・マリアのご像はどこ」と尋ねる。これは長崎での有名な信徒発見の話である。鎖国後の長期にわたり、迫害の中で日本の中にキリスト教信仰が息づいていたことに感動を禁じ得ない。

信徒発見一五〇周年

日本カトリックの歴史を語る多くの蔵書が、聖三木図書館にある。来年の二〇一五年に、信徒発見の百五十周年を迎える。併せて長崎の教会群とキリスト教関連の遺産が、ユネスコ世界遺産の候補となった。四六五年に及ぶ日本でのカトリックの歴史が、世界に評価されることを心から願いたい。



1m四方の籠のような牢

津和野の殉教者や棄教者たちの記録が数多く残されています。三尺牢の迫害のさなかに和三郎を青い衣を着た聖母のような方が慰めてくださった話。十五歳の祐次郎少年が屋根の親雀が子雀にえさを与えるのを見て、天の父のことを考えたこと。四歳のモリちゃんに役人のお菓子の誘惑を断って、信仰を守り通したこと。棄教者たちが迫害の苦しみにある仲間にも励まして差し入れの援助をした美しい話も残っています。

条約の改正に動いていた明治政府はキリシタン迫害についての諸外国からの批判によって信教の自由へと方向転換をせざるを得なかったのです。ついにキリスト教の禁止の高札が撤廃され（一八七三）、キリスト教は黙認され、流刑者は故郷、浦上に帰ることになりました。

乙女峠も迫害を耐え忍んだ子孫の方々の手によって聖地としての相応しい装いも整ってまいりました。ぜひ乙女峠において、この地で信仰を守り抜いた殉教者たちの精神を肌で感じ取ってください。頼もしい味方です。

乙女峠も迫害を耐え忍んだ子孫の方々の手によって聖地としての相応しい装いも整ってまいりました。ぜひ乙女峠において、この地で信仰を守り抜いた殉教者たちの精神を肌で感じ取ってください。頼もしい味方です。

中国との関係を改善へ
この夏教皇様が韓国を公式訪問なさった折、その途中飛行機が中国上空を通過した際、教皇様はその飛行機の中で中国のために特別にお祈りをなされた、と報道されました。

また最近中国の国家主席習近平をバチカンに招待したい旨の親書を非公式に送られたとも伝えられました。どうでしょうか。実現するのでしょうか。このよう

なニュースはすぐ日本にも知らされ、私達日本の教会も中国の教会のために祈ったものです。
今の教皇様は若い時に一時日本に宣教師として行く希望をもっていました。



中国のカトリック事情 ローマ公認の教会と共産党承認の教会

イエズス会中国センター室長 井上 潔

これはその一つの表れだと思えます。そのうち近いうちにきつと日本にも来てくださると思えます。

カトリック信徒九〇〇万人とも

アジアと言えは中国を抜きにしては考えられません。アジアの教会、特に中国の教会はどのような状態なのでしょう。皆さまざまにご存知のように、中国の宗教は、共産党の中央委員会『全国人民代表者会議（全人代）』の指揮下に置かれています。全人代の下に宗教を監視する特別な小委員会が設けられ、そのもとで特定な宗教に特別な承認・了承を得た宗教のみ許して存在させています。活動は静かで、目立たない形で行われません。現在の中国が成立した（一九四九年）当初は、宗教なるものはまったく許されていませんでした。共産党の規約

憲法上には宗教なるものはなかったのです。ところが、そのような状況に対して諸外国からの強い反対・反発があり、登小平の時代に中国の憲法に宗教なるもの活動の許す項目が入りました。それ以後宗教なるものが少し表面的になり、活動が行われるようになったのです。しかしそのような状況下になっても、宗教なるものは、まだまだ共産党、政府のおかしな嫌がらせを受け続けていたようです。しかし、中国国民の信仰、良心的・道徳的生活への傾向は強く、圧迫されればされるほど、宗教的あこがれが強くなり、心の神回帰に促す傾向が出てきたようです。その結果、現在のプロテスタント信者は二千三百万人、カトリック信者は九百万人にもなるそうです。この数は政府系の統計なので、あまり信用はできませんが……。実際にはもともと多いはず

です。「目障りだから十字架を撤去」先日の読売新聞（九月二十三日朝刊）に、浙江省温州の教会尖塔上の十字架を取り払われたと言うニュースが出ていました。近くにある教会、特に大きな道に面している教会の十字架、外部に目立つ形でそびえている十字架は軒並み取り払われたとか。何のために？ どのような教会の十字架を、敢えてこのようなことをしたのか？ ある教会関係者は『十字架が目立ち、目障りだから撤去された』と云っているとか。撤去少し前に共産党トップがその地方を視察していたそうで、そのすぐ後に撤去されたそうです。キリスト教の影響力の拡大を抑えたいのが本音らしいですね。この際の教会はプロテスタントの教会が主だったようですが、

カトリックの教会にはこのようなことは起こっていないのでしょうか？

ミサ典礼は日本と同じ

二年前広東省を旅行した折、その地方のカトリックの司教座聖堂を訪問し、ミサにあずかりました。そこでのミサの様子に驚きました。と言うか、感動いたしました。まったく日本の教会と同じ。祭壇上の司祭の祈り、信者方の大きな声での祈り、聖歌歌唱、相互の挨拶……。後で聞きましたが、公安なる者もいたけれど、外で駐車場の脇で見張っているのが、せいぜいだとか。数年前までは教会にやってくる信者一人一人に敏感な目つきを示し、緊張感を漂わせていたのに……。数年前まで迫害されていたバチカン公認の地下教会がここまで寛大に扱われるようになったなんて……。感謝、感謝です。日本に来ていらつしやる信徒の方々に聞いても、今では教会なるものはかなり寛大に受け入れられているそうです。公に政府・共産党に反抗しない限り……。この傾向がこれからもずっと続きますように祈りたいものです。

声 風、海、聖三木図書館

堀 妙子（東京都中野区在住）

聖三木図書館に行くには岐部ホールの入力の扉を開け、左にあるもう一つの扉を開ける。右のガラスケースには教会の慶事や典礼が一目瞭然とディスプレイされている。しばし佇み、人生の荒波から離れる。ほの暗い階段を上ると図書館に着き、風（なぎ）の海の空間に入る。カウンターの左には新刊、キリスト教書籍の動静を知る。カウンターの前にはキリスト教の月刊誌等がある。それぞれの月刊誌の目をリサーチ。
その後、聖霊を受けて書かれたすべての本に感謝を献げ、「わたしなりにがんばります」と心のなかで誓い、その日の目的の本を探す。やっぱりあった！手続きを済ませて、また荒波に小舟を出す。
イグナチオ教会に行き「ゆるしの秘跡」を受けると、償いが「テ・デウム」だった。売店に駆け込む。するとシスターが「聖三木、聖三木……」と上品に叫ぶ。図書館に駆け込み、祈りの本から「テ・デウム」をコピーして聖堂に戻り、黙読しつつ、ゆるしを願うこともあった。
この図書館の名前は、日本26聖人殉教者のパウロ三木の名を冠している。十字架上から「ゆるし」を説いたことでも知られている。書籍ばかりではなく「ゆるしの秘跡」までお世話になっている。

近頃、聖三木図書館でよく読まれている本 2014年10月

天と地の上で：教皇とラビの対話	教皇フランシスコ他著	ミルトス
福音の喜び：使徒的勧告	教皇フランシスコ著	カトリック中央協議会
教会法で知るカトリック・ライフ	菅原裕二著	ドン・ボスコ社
Q&A 40回	曾野綾子著	小学館
人間になるための時間	賀川豊彦著	ミルトス
小説キリスト	宮嶋望著	いのちのこば社
いらぬ人間なんていない	広岡義之著	新教出版社
フランクル人生論入門	山本芳久著	慶応義塾大学出版会
トマス・アクィナス肯定の哲学	須沢かおり著	知泉書館
エディット・シュタインの道程	渡辺和子著	PHP研究所
人は死ぬとき何を思うのか	森下辰衛著	小学館
『氷点』解説		
キリシタン大名	嶋崎賢児著	三学出版
高山右近の足跡を歩く	高木慶子著	PHP研究所
それでも人は生かされている		



【特別寄稿】

「ガイア・イニシアティブ」活動とは

NPO法人
ガイア・イニシアティブ代表

野中 ともよ

ハワイで考える日々
水平線の両端がひゅーんとまあるい。その上を大きな雲たちが、お腹の下に雨を降らせながら、滑るように飛んでいく……この窓には、毎日の自然の物語の音が溢れている。

今日の夕陽はもう、あの半島に沈むようになつた。ひと時として、一日として、同じシナリオで動くことなどはない、自然界の営み。

昨年と同様に、今年も夏からハワイ大学の研究所にきている。この四十五階の窓の至福……。アジアやアメリカからのFELLOWたちと、新しい時代のリーダーシップ研究や、沖縄の離島での、新しいプロジェクトを準備する毎日が流れていく。

『再生エネルギーだけで暮らしていく方法はないものだろうか?』『食べる物は、出来るだけ自分たちのコミュニケーションでつくって賄っていきける方法はないのか?その時、都市の生活者にできることは?土地がある地方ではどうすればいいのか?』

二〇〇七年に創設してから、地球をひとつの生きている有機体と捉える『GAI A』という価値軸を中心に、主に二つのプロジェクト(十一年の森)長野県王滝村支援とソーラーランタン(インド支援)活動をしてきたガイア・イニシアティブだが、やはり、二〇一一年の東日本大震災以降は、「生きている」のではなく、「生かされている」存在でしかない、私たち「人間」の本質を支えてくれている「水」「空気」「食料」「エネルギー」の根本を見つめなければ『未来』を紡ぎ、子供達へと繋げていくことができなくなるのでは?こんな課題に直面した。となれば、

もう『やるしかないでしょう!』と相変わらずの(コマッタ)SOPHIAN魂がムクムク。

限られた土地と資源、そして、エネルギー問題に食糧安全保障……この地球的課題は、目線の縮尺さえ変えれば「離島」そのものだ!というわけで二〇一五年度に向けてのあらたなプロジェクトが動き出したという次第。離島で真摯にこの問題と向き合い、解を紡いでいくこと……そしてそれを世界と共有すること。その先にこそ、未来のこどもたちの笑顔があると信じている。



シンボル・ネモフィラの花

淡青色のネモフィラの花が初夏の光を浴びて輝いている様子は、息をのむような美しさです。ネモフィラは、北米原産の一年草で、花言葉は『ゆるし』と云います。そこで、当友の会のシンボルにしています。この写真は、大分県中津市本耶馬溪町の山国川沿いの岩をくり貫いたトンネル「青の洞門」の近く元水田に今年初夏に咲いた様子です。二年前の九州北部豪雨のとき流失した水田跡に近くの住民がネモフィラの種をまいたところ、青い花が一面を埋めつくしました。今季も五十アールに広げて見事に咲き、景勝地「青の洞門」に名物が増えたと観光客も喜んでいました。このトンネルは、十八世紀中ごろ、僧、禅海が30年余かけて開削したと伝えられています。作家、菊池寛の小説『恩讐の彼方に』で、取り上げられて有名になりました。トンネル上流の耶馬溪は紅葉の名所です。(写真)中津市役所広報課提供

自立する地域創りのために

『環境問題』と括弧で自分と切り離している時代はとうに、終わっている。景気も経済も政治も、学校も会社も、『いのち』あつてこそそのモロモロでしかないのだ。お金(経済)はパワフルな道具であることに間違いはない。でも、やはり『道具』でしかない。「手段」であつて、人生の「目的」などでは断じてない。

わたしたちガイア・イニシアティブはこれからも、たくさんの方たちの未来へ向けた愛とエネルギーを頂戴しながら、来る年にはあらたな、自立する地域創りのために精進していきたいと思つてい

【野中 ともよ氏】NPO法人ガイア・イニシアティブ代表。上智大学大学院文学研究科博士前期課程終了。NHK等でキャスターを務めた後、企業役員、政府審議会委員を歴任。二〇〇七年ガイア・イニシアティブ設立、代表に就任。二〇一三年六月よりEast-West Center (ハワイ大学) 客員教授。

聖三木図書館から

【お知らせ】

◎冬休みの長期貸出について
十二月二十三日(火)〜一月五日(月)までのクリスマス休暇及び冬期休館に伴い、十二月二日(火)から長期貸出を始めます。休館中の返却は返却ポストへ。
◎二〇一四年十月一日(水)より開館時間が変わりました。
新しい開館時間は次の通りです。

月〜土 十一時〜十八時
日 十時〜十七時
休館日 木曜、月末の館内整理日、祝日、年末年始、夏期休暇
【友の会からのお願い】
聖三木図書館友の会の継続更新をお願いいたします。更新手続きと会費の納入はカウンターにて受付けます。
◎年会費 一般三〇〇〇円、学生一〇〇〇円、賛助会員一〇〇〇〇円
◎年会費は、銀行口座(ゆうちょ)口座からの自動払込みをご利用いただけます。
◎年会費をお振込みで納入される場合、必ず銀行四谷支店 普通預金 口座番号 二15848
口座名義 イエズスカイセイミキ トシヨカントモノカイ
*お名前の後に会員番号をお書きください。
◎新規入会の手続きは随時カウンターで受付けております。本人確認のための書類(運転免許証・保険証など)、学生の方は学生証をご提示ください。

